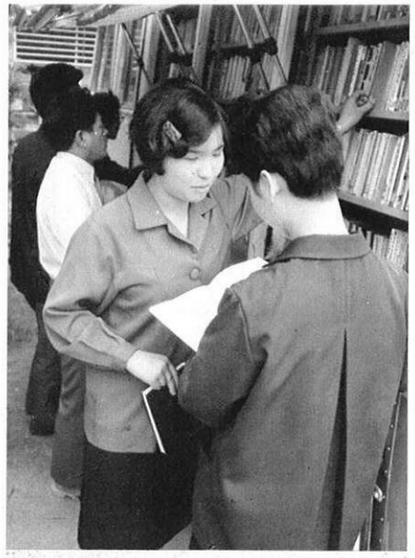
ある日の移動図書館 いずみ号

◀町から村へ…きょうは、甘夏の里、田浦町へ—。

▶町の辻や公民館が指定の配本場所。配本日は村の人たちが待っていてくれる。（湯浦町にて）

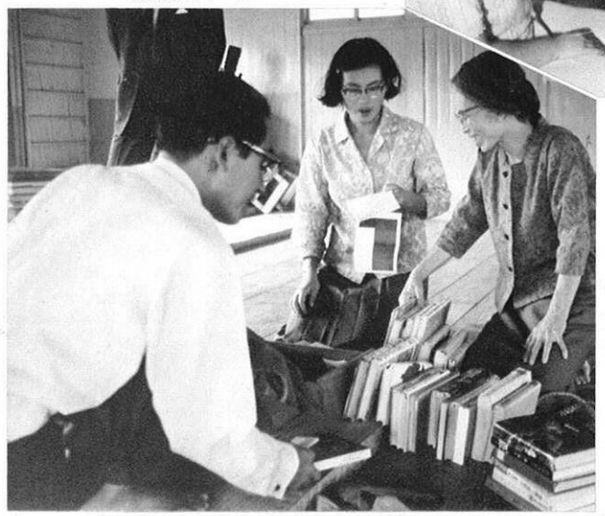
▲農村部では、若い人たちの読書欲が注目されている。〈ベストセラーも読みたいし、園芸の専門書も借りたいし…文学ものを系統立てて読破したいし…。〉
いずみ号の周辺はいつもにぎわっている。（田浦町にて）

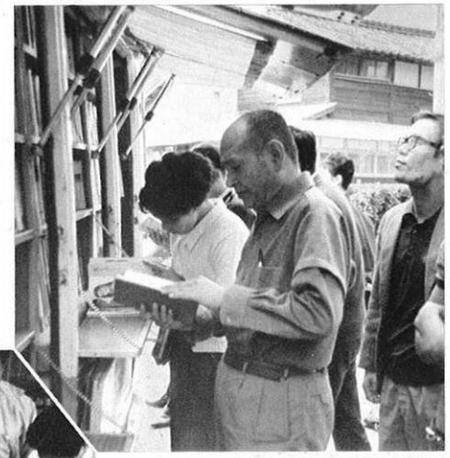


▲〈あの本読んで見た感想はどう？きょうはこの本を借りてみたの。〉

▲読書グループでは読書会を定期的にひらいている。リーダーを中心に母親も子どもも一緒になごやかだ。（玉名郡三加和町にて）

▼サァ本が届いた。この本とそれはAさんの希望図書で……と。（湯浦町にて）





▲いずみ号がフタをあけると書架には本がいっぱい。どれにしようかなァー。（田浦町にて）

▲貸出し本の受付整理をする人たちの手さばきもなれたもの。本が痛んでないか気を配りながら……。

〝本を読む人が少なくなった〟といわれるこの頃だが、一方では読書会や「親と子の二十分間読書運動」などの活動が活発に進められている。（本文参照）

県立図書館のいずみ号利用による読書運動もその一つの姿。

町や村の辻々ではきょうもいずみ号の到着を首を長くして待っている。